

## 現代社会学部公開講座

## 「ナショナリズムと21世紀の日本の道」

## —教育の現場と歴史からの証言に聴く—

編集：小波秀雄

わが国の政治的あるいは文化的なさまざまな局面において、国家主義へと傾斜していく動きが、1980～90年代以降強まってきた。特に教育行政においては、「日の丸・君が代」の現場への強制を端的な例として、国家主義的統制が強められる状況が激しくなっており、教師や児童・生徒の置かれた心理的状况にも影響を与えるに至っている。本講座では、講師に精神医学者の野田正彰本学部教授、ドイツ文学者の林功三京大名誉教授を迎えて、現代の日本の置かれた社会的な状況を、教育現場の人々の心の問題、世界史からの視点という二つの視点から照らし出した。取りまとめには小波秀雄本学部教授が当たった。

## 公開講座プログラム

開催日時 2002年6月29日  
場 所 京都女子大学 J校舎525教室  
司会・進行 小波秀雄  
講 演 林 功三(京都大学文学部名誉教授)  
講 演 野田正彰(京都女子大学現代社会学部教授)  
質疑・討論

## 講演の概要

### 「ナショナリズムの道、日本の場合・ドイツの場合」

..... 林 功 三

まず最初にナショナリズムという概念の規定が紹介された後、ドイツにおいてナチズムにまで至ったナショナリズムの流れが戦前の日本とよく似たものであったこと、しかしながら、戦後のドイツと日本の歴史は大変違ったものになったことの分析がなされた。さらに、最近のヨーロッパにおいて極右、ネオナチによる難民排斥、人種差別の動きが強まっていること、一方において日本では難民排除が国家の政策として強められていて、それを追うようにして、ドイツにおいてさえも、警察国家への傾斜が新しいファシズムへの道を開きかねないという予測が語られた。

### 「青少年の心と教育の国家主義的傾向」

..... 野 田 正 彰

学校教育の現場では、この数年間、「日の丸・君が代」の強制が荒れ狂っている。その実態が各地での具体的な事例によって明らかにされた。それはちょうど戦前の植民地時代に行われた強制と同じ形をとっている。また学校の運営における管理統制が非常に強まってくる一方で、学校という職場の中でのさまざまな統制が引き起こしている現象が「指導力不足教員」問題のような形で宣伝されている。個別の教科、指導方針でも「絶対評価」の導入の問題点、社会科教科書に見られる国家主義的傾向、学校への臨床心理士の配置の問題点、「心のノート」の突然の配布など、数多くの事例が、現在の危険な国家主義的な教育統制の方向を向いていることが指摘された。結びとして、そのような実態を多くの人が知らなければ、この社会は変わることはできないと語られた。